浜松市東区俳句の里づくり事業

楽しく俳句
わくわく俳句

第15回 十湖賞 俳句大会

入選句集

人と人心ふれあう未来へ東区
令和５年２月発行
＜発行元＞　浜松市東区俳句の里づくり事業実行委員会
＜事務局＞　浜松市東区役所区振興課内
浜松市東区流通元町 20 番３号
TEL 053-424-0115
E メール e-shinko@city.hamamatsu.shizuoka.jp

■主催／浜松市東区俳句の里づくり事業実行委員会、浜松市
■後援／静岡県教育委員会、浜松市教育委員会、中日新聞東海本社、静岡新聞社・静岡放送、FM Haro!、浜松ケーブルテレビ株式会社

「十湖賞」と「浜松市東区俳句の里づくり事業」

江戸時代末期、松島十湖翁は、現在の浜松市東区豊西町に生まれ、俳人にして政治家、さらには地域貢献に務めた篤志家です。生涯に詠んだ句は七千句とも言われ、全国各地に多くの門人がいました。

十湖翁の俳句は、松尾芭蕉からの蕉風を継承すべく、花鳥風月といわれる春夏秋冬・四季折々の自然、その中での生活を詠む伝統的なものです。

「はま松は出世城なり初松魚」は、「出世の街・浜松」を象徴した、浜松を誇る気持ちを詠んだ句です。

東区では、こうした十湖翁の遺徳を称えるとともに、「郷土を愛する心」を今に伝えるべく「十湖賞」俳句大会を開催しています。

元来、東区内には多くの句碑群があり、多くの俳人も輩出していることから、「俳句の里」としての側面を垣間見ることができます。

浜松市東区及び実行委員会では、このような背景のもと、「浜松市東区俳句の里づくり事業」を行っています。

第十五回「十湖賞」俳句大会入選句集

令和五年二月十一日（土・祝）
於　浜松市総合産業展示館 北館1号ホール

目次

ごあいさつ ・・・・・・・・・・ 2・3
十湖大賞 ・・・・・・・・・・ 4
十湖賞 ・・・・・・・・・・ 5
東区長賞
県教育長賞
市教育長賞 ・・・・・・・・ 6
特選 ・・・・・・・・・・ 7
佳作 ・・・・・・・・・・ 8・9
奨励賞 ・・・・・・・・・・ 10～13

選者

天野　薫氏
（「みづうみ」編集長）

髙柳克弘氏
（「鷹」編集長）

村松二本氏
（「椎」主宰）

百合山真苗氏
（「海坂」編集長）

※五十音順

第十五回「十湖賞」俳句大会投句実績

一般の部		高校生の部		中学生の部		小学生以下の部		全　体	
人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数
627	1,237	2,297	4,019	1,978	3,407	1,885	3,170	6,787	11,833

一般の部・地域別	
地域	投句数
市内	432
県内（浜松市外）	106
県外	699
合計	1,237

※募集期間：令和４年７月１日（金）～令和４年９月30日（金）

ごあいさつ

浜松市東区俳句の里づくり事業実行委員会
委員長　松島 知次

第十五回「十湖賞」俳句大会は、全体で六、七八七人、一万一、八三三句もの投句をいただきました。投句者数・投句数ともに前回大会を上回る結果となり、本事業を広く知っていただいていることを非常に喜ばしく思っております。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響による行動制限が徐々に解除され、久しぶりの遠出や旧友との再会などをされた方も多くいらっしゃるのではないでしょうか。その中で、皆さまには日々の生活の中で感じた思いなどを句に込めて素晴らしい句を詠んでいただきました。

浜松市東区俳句の里づくり事業実行委員会では、これからも俳句を通じ、郷土を愛する気持ちを育むとともに、俳句文化の振興を図るため創意工夫を重ねてまいります。

終わりに、入選された皆様に心よりお祝い申し上げるとともに、選者の皆様、並びに事業推進にご尽力いただきました関係者の皆様へ厚くお礼を申し上げます。皆様方の今後ますますのご活躍、ご多幸をお祈り申し上げまして挨拶とさせていただきます。

浜松市東区長　藤田 晴康

浜松市東区では、現在の東区豊西町に生まれ、明治・大正期に活躍した俳人松島十湖翁により培われた俳句の盛んな地域性を活かし、平成十九年度から「浜松市東区俳句の里づくり事業」を実施しております。今年度は、俳句大会も十五回目の節目を迎えることとなりました。この間、多くの皆さまに支えていただきましたこと誠に感謝申し上げます。

今大会において、前大会よりも多くの皆さまにご投句いただきましたこと、また、表彰式を無事に開催できたことを大変嬉しく思っております。

今後も、地域の大切な財産として俳句大会を盛り上げると同時に、皆さまに郷土を愛する心を育んでいただけるよう創意工夫を重ね、本事業に取り組んでまいります。

結びにあたり、大会に投句いただいた皆様、選考していただいた選者の皆様、そして本事業に携わっていただいた全ての皆様に深く感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

十湖大賞・十湖賞〈小学生以下の部〉

けんかしてもこたつにみんな寄ってくる

和田東小学校六年　齊田 旺生

評：今は少なくなってしまったのかもしれないが、この句には家族の中心に「こたつ」が置かれているあたたかな家庭が描かれている。「けんかしても」は字余りだが、けんかの後の気まずさを表すような効果がある。でもやっぱり家族「みんな」で「こたつ」を囲んであたたまるのだ。（村松二本）

十湖賞

〈一般の部〉

内に声かけて初雪見失ふ

愛知県瀬戸市　尾崎 八重子

評：初雪を見かけて、家の中の家族に声をかける。しかし、その数秒の間に、もう降りやんでしまったのだ。「え、どこに？」という家族の怪訝な声が聞こえてきそうだ。まさに「初雪」。家族というもののよろしさも思わせる。（高柳克弘）

〈高校生の部〉

父の日の写真嫌いの父を撮る

西遠女子学園高校三年　鈴木 向葵

評：父の日に父の写真を撮った。その父は「写真嫌い」すんなりとは撮らしてくれなかった。「記念の日だから」「いい表情をしているから。」様々な言葉をかけやっと撮ることができた。父と娘の微笑ましく温かな関わりがみえる。（天野薫）

〈中学生の部〉

帰り道一歩一歩が秋めいて

積志中学校一年　西林 帆香

評：通いなれた学校帰りの道で生まれた句に違いない。身近だからこそ気づいた季節の移ろいである。風や雲や足元の草花に秋の訪れを感じた爽やかな気分が率直に詠まれている。「一歩一歩が」の表現に実感が籠っている。（百合山真苗）

東区長賞

〈一般の部〉　いくたびも途中下車して秋惜しむ

神奈川県横浜市　多田 学友

評：昨年の秋は好天に恵まれて、この句のように存分に秋を惜しむことができたのではないだろうか。例えば天竜浜名湖鉄道のような、眺めの良い場所があちらこちらにある沿線なのかもしれない。降り立つ駅ごとに心行くまで過ぎ行く「秋」を惜しんでいる。（村松二本）

県教育長賞

〈高校生の部〉　スタブロにあしをかけると青葉風

掛川東高校一年　落合 未羽

評：「スタブロ」は短距離走のスタート時点に置く器具のこと。そこに足を掛けたとたんに、青葉を渡る風が吹いてきた。これからピストルの音とともに始まるものが、颯々たる疾走であることを予兆している。（髙柳克弘）

市教育長賞

〈中学生の部〉　ペダルこぐ花火咲き散る水たまり

天竜中学校三年　古川 日菜

評：夜空を彩る花火の意外な場面を詠んでいて新鮮である。家路を急ぐ自転車と水たまりに映る花火のぶつかり合うような美の衝撃が感じられて印象的である。「花火咲き散る」は作者自身にしか表現できない言葉である。（百合山真苗）

〈小学生以下の部〉　簾から見たら星空ぴかぴかと

中郡小学校五年　阿部 千音

評：「簾」から見たいつもとは趣の異なる星空の美しさや輝きを発見した感動を詠った。上五中七で作者の立ち位置を明らかにしている。簾に拠り星の光が「ぴかぴか」と。小学生らしい優しさ・感性に心打たれる句。（天野薫）

特選

〈一般の部〉

燈火親し幼子と読むぐりとぐら

浜松市東区　鈴木 セツコ

皺の手に皺の手ひかれ初詣

三重県津市　駒田 博之

〈高校生の部〉

秋風が私が先と本を読む

浜松修学舎高校一年　鈴木 向日葵

少し前さわれたはずのかぶとむし

浜松湖北高校三年　柳井 康佑

〈中学生の部〉

四歳児背のびして見る冷蔵庫

笠井中学校三年　鈴木 芭奈

すいか割り自信をもって地面割る

中郡中学校一年　徳増 陽菜乃

〈小学生以下の部〉

卒業し目から涙も顔笑顔

西都台小学校六年　長尾 涼太郎

赤い玉線香花火の涙かな

積志小学校五年　鶴賀 有

佳作

〈一般の部〉

三歳と米寿の握手天高し
浜松市中区　堀内 享子

容赦なくカレーの匂ひ夏季講座
青森県北津軽郡鶴田町　竹浪 誠也

貝釦涼しき母のワンピース
岐阜県岐阜市　平野 栄子

鳥籠に小さな水辺涼新た
京都府亀岡市　井上 實

秋遍路病める息子と挑戦す
浜松市浜北区　山下 晏義

秋高し親も手うごく稚児太鼓
福井県福井市　牧野 京子

〈中学生の部〉

夕涼みビールの味を父に問う
天竜中学校三年　間渕 結菜

卒業や嬉し涙の祖母の顔
天竜中学校一年　大森 柚芽

スイカ食う宇宙レベルの親友と
浜松修学舎中学校三年　吉野 暖

桜咲くきらきら光るシャープペン
中郡中学校一年　千葉 小暖

目覚ましが鳴るのをやめた夏休み
与進中学校三年　村尾 倭

帰省した兄が作ったフルコース
笠井中学校二年　神戸 ささぐ

〈高校生の部〉

地にしみる親子の声と打水と
浜北西高校一年　鈴木 征良

菜種梅雨映画世界へひとり旅
浜北西高校三年　糟谷 舞星

まだ固いローファー履いて踏む桜
掛川東高校一年　大石 泉穂

バスを待つ僕らを見てる積乱雲
静清高校一年　松島 宏典

ライン際落ちるボールで終わる夏
浜松東高校一年　内野 優蘭

祖父の腕走る大樹のごとき血管
西宮市立西宮高校三年　青木 日向子

〈小学生以下の部〉

じいちゃんのスイカあまいと電話する
与進北小学校六年　大西 出雲

日日草水をあげればほら起立
曳馬小学校五年　平野 杏奈

ある日私はミンミンゼミをさわった
与進北小学校六年　間渕 美貴

夏休み一人で自転車カメさがし
中郡小学校六年　近藤 旬時

ひ岸花お経に歩くお父さん
上阿多古小学校六年　高橋 佑季

なぞの穴観察中にありがきた
豊西小学校六年　寺田 皇伽

奨励賞

〈一般の部〉

子が一人大人三人水遊び
岐阜県不破郡垂井町　岩田 恭子

「やらまい」と喜寿の掛け声秋の庭
東京都町田市　村越 一紀

齢にも艶というもの酔芙蓉
茨城県土浦市　貝塚 勇

春炬燵手毬縫いたる卒寿の手
浜松市天竜区　大須賀 計博

梅雨の蝶生きとし生くるものにほふ
大阪府豊中市　荻野 ひとみ

秋暑し皆うまさうに餃子食ぶ
神奈川県横浜市港北区　竹澤 聡

失敗は失敗のもと金亀子
長野県須坂市　宮部 高典

囀や枝にぶら下げ木のクイズ
浜松市中区　安立 由美子

胡座かく女の表紙八月号
徳島県美馬市　長江 公子

褒め言葉は光りになりて竹の春
浜松市南区　河合 三代子

靴紐涼し初めての蝶結び
愛知県江南市　中西 定子

花売も虫売もゐて朝の市
沖縄県那覇市　稲福 達也

お祝いの大きな辞典春一番
浜松市東区　松本 ひで子

浜名湖に深く一礼漁始
茨城県土浦市　貝塚 妙子

幸せは夫の擂りたるとろろ汁
山口県下松市　栗田 道子

蝶のふと止まりし苗を買ひにけり
浜松市東区　大隅 敏子

棟梁と秋の燕を見送りぬ
浜松市中区　原 百合子

北欧の地核をぬくめ夕焚火
浜松市中区　伊藤 斉

旅立ちが格好良過ぎる草の絮
京都府宇治市　濱岡 学

いぼむしり新幹線に乗りにけり
掛川市　高島 昭子

〈高校生の部〉

受験生問答しつつ就く家路
浜北西高校一年　小出 知沙

木の芽時新制服に手を通す
浜松湖北高校三年　宮野 涼香

春惜しむそっとひらくは通信簿
浜北西高校三年　寺田 留菜

空っぽの筆箱一つ秋の雲
静清高校二年　松花 尽

秋出水被災の記憶次世代へ
浜北西高校一年　奥山 萌那

泣いたあとの眼球熱を持つ良夜
日本航空高校二年　日下部 友奏

汗たらすここ踏ん張るぞ頑張るぞ
浜北西高校一年　杉本 弓夏

家族写真セロリ食べれず泣く私
伊東商業高校三年　伊藤 優希

部活後の空は日没冬来たり
掛川東高校一年　山崎 香羽

ココアのむきみを見る僕焚火だな
伊東商業高校三年　野田 琴菜

月を見て君に連絡したくなる
掛川東高校一年　冨口 温

花火よりきれいに笑う君がいる
浜松学芸高校一年　齊藤 怜華

猫みたいたまには少し昼寝する
浜北西高校一年　中村 心春

炎天下砂浜走る僕と影
浜松修学舎高校二年　立石 幸己

夏休み清々しいなボランティア
天竜高校春野校舎二年　鈴木 祐輝

紅葉は一葉一葉に美学あり
浜松修学舎高校三年　塚本 海理

あみを持ちクワガタたちと心理戦
浜北西高校一年　鈴木 智也

部活再開の知らせ風は爽やか
掛川東高校一年　松下 裕紀

夏の海映る僕らが揺れ動く
掛川東高校一年　白岩 来萌

炎天下一つの球に集まる目
掛川東高校一年　山下 紗穂

胡坐（あぐら）　金亀子（こがねむし）　餃子（ぎょうざ）

奨励賞

〈中学生の部〉

妹に夏の月見て物語る
与進中学校三年　江間 真都

鉛筆の芯が丸まる夏休み
笠井中学校二年　葛谷 美帆

暑さとぶおかえりなさい笑顔まう
天竜中学校一年　山下 和花

盆の宵に揃いのたすき宙を舞う
笠井中学校二年　加藤 大翔

向こう岸麦わら帽子ゆらいでる
笠井中学校三年　鈴木 琢朗

空間をしはいしているせみしぐれ
与進中学校一年　松下 由佳

音のしくみ調べて終える夏休み
与進中学校一年　平尾 京乃

放課後は夕焼け空の撮影会
加藤学園暁秀中学校三年　遠藤 沙耶

チョコチップ食べてるほほにテントウムシ
笠井中学校一年　赤木 凜花

ベランダでほたると共にアイスティー
中郡中学校一年　杉本 芽依

始業式鏡の前で笑顔する
笠井中学校三年　竹下 和大

薫風や私のフルート響く午後
笠井中学校三年　杉浦 紗英

月涼し私の歴史十五年
笠井中学校三年　渡邊 心香

山小屋の灯り目印富士の夏
加藤学園暁秀中学校三年　大谷 心乃

キラキラと水しぶき上げ夏が来た
浜松学芸中学校二年　鈴木 蒼菜

朧月悔しさにじむホイッスル
西遠女子学園中学校三年　杉山 花那

ひんやりと水の音するきゅうりかな
与進中学校三年　平松 琥斗

こいのぼりいつもの町を見下ろして
笠井中学校三年　東原 日向

パンジーや新たな友に出会いたり
笠井中学校三年　内山 颯人

夏祭りなれない服で友を待つ
与進中学校三年　甲斐 愛純

〈小学生以下の部〉

青色に白い絵の具で夏の色
与進小学校五年　鈴木 詩季

川遊びうきわの中にすける水
豊西小学校六年　鈴木 汐音

はちがつにとうさんきたくひさしぶり
豊西小学校四年　増田 康羽

祖母の家花火をじいじみてるかな
笠井小学校五年　早野 倫央

暑いのに暑くないよとおばあちゃん
与進北小学校六年　菅谷 壮汰

あつき日にえんぴつけずりつよいいし
笠井小学校二年　黒宮 光生

夏の波と自由時間に追いかけっこ
中ノ町小学校六年　内山 芽依杏

なつのフェス私と弟歌手ごっこ
神久呂小学校五年　金澤 美音

夏休みおふろあらいあわとおどる
県居小学校三年　和久田 紗楽

ねむれない友とかくれるふとんの中
中郡小学校六年　植松 ユカリ

十湖さんがすずしい俳句考えた
豊西小学校五年　松島 真奈

川遊び水の流れに身をまかす
蒲小学校六年　本道 京香

予報通り雨が上がりて海開き
大瀬小学校六年　水谷 隼士

いもうとのあいすはいつもべたべただ
笠井小学校一年　川野 雄翔

すきな物けいさつ官と虫と本
県居小学校三年　太田 和

セミのうか白い体のエネルギー
豊西小学校四年　川合 凰翔

軽やかにちょうの足つく花の上
新居小学校六年　渡邊 幸

こいのぼり風に向かって話してる
積志小学校五年　大塚 真帆

夏休みきゅうりのツルが歩き出す
与進小学校四年　髙嶋 紗帆

かたつむり葉っぱのベンチでひとやすみ
可美小学校五年　岡本 大輝